

地図帳から韓国を探る

大阪市立天下茶屋小学校 片岡万喜雄

1 はじめに

多様な民族や国籍の人々が住む大阪市では、人権教育や国際理解教育に力を入れている。本校にも、朝鮮半島の民族衣装や民族楽器・遊具がそろっており、課外クラブで多くの子どもが朝鮮半島の文化を体験的に学んでいる。そんな文化面での共感的理解に加えて、6年生では、地理的・歴史的な面から日韓のつながりについてももう一度じっくりと考えさせたい。その最適な仕掛けが地図帳である。

ここでは、日韓フェリーの航路をたどるなかで、日韓の近さを再確認し、両国の歴史的なつながりにも気づかせる展開を工夫した。

2 活きたヒラメと韓国フェリー

まず、身近な例をきっかけに、日韓の近さを実感するようにした。

跳ねるヒラメが運ばれる映像を見せ、「このヒラメはどこで水揚げしてどうやって大阪へ運ばれたのでしょうか」とたずねた。「明石から」「四国から高速道路で」などの予想が出た。トラックのハングルを見て、韓国のプサンからフェリーで運ばれたことがわかってくと、「韓国ってそんなに近いの?」「どこを通過してくるの?」という驚きや疑問が出てきた。

そこで、『楽しく学ぶ小学生の地図帳 初訂版』（以下地図帳）のp.12を開き、大阪とプサンの距離を測る。約700km。「沖縄や北海道よりもはるかに近いんや」の声。6年生な

ので、速さの計算もできる。フェリーは時速約40kmなので、片道が約18時間だとわかった。子どもたちは、活魚が運べるほどの日韓の近さを、地図を通して実感できた。

3 昔から続く日韓の航路

次に、地理的なつながりと歴史的なつながりに関連づけて考えていくようにした。

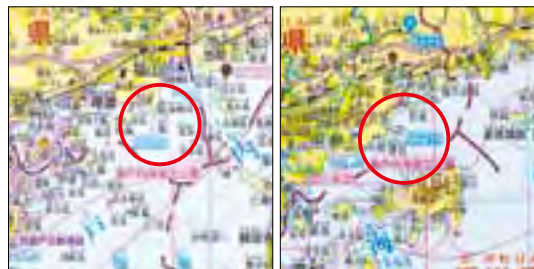
Aさんの「たぶん瀬戸内海を通る」という予想を取り上げ、地図帳で根拠を探し合った。

少し時間を与えると、地図帳p.20の関門海峡の航路の西向きに「プサンへ」、東向きに「松山・大阪へ」という記述を見つけた。



『楽しく学ぶ小学生の地図帳』 p.20

さらに、「地図帳のいろんなページで、フェリーの船長になったつもりで実際に指でなぞって確かめてみなさい」と指示し、グループに分かれて気づいたことを話し合った。次のような意見が出た。



『楽しく学ぶ小学生の地図帳』 p.25・26

○「瀬戸内海の鞆公園（p.25）と牛窓（p.26）に『朝鮮通信使』とあるのは、鎖国を調べ

たときに教科書の地図に載っていた朝鮮通信使と交流した町です。」

○「p.50の『遣隋使』や『文化や物』の通り道もやっぱり大阪と瀬戸内海とプサンを通っています。」



『楽しく学ぶ小学生の地図帳』 p.50

○「昔から瀬戸内海を通して大阪と韓国がつながってるのがすごいと思います。」

子どもたちは、日本と韓国、とくに大阪とプサンが、昔からずっと同じ航路でつながっていることを実感し、感激していた。

4 過去から・現在・未来へ

この後、2学期までに学んだ米作りの伝播、渡来人、秀吉の朝鮮出兵、朝鮮通信使、韓国併合と独立運動などを年表にまとめた。日韓ワールドカップサッカーや韓流ブームなど、子どもが調べた最近の日韓関係も書き入れた。そして、韓国の自然や産業、日本との貿易、人々の生活について複線型で調べていった。

また、大阪市港湾局発行の副読本『わたしたちの大阪港』で、日韓フェリーは隔日運航

され、旅客数は年々増えていることを調べた。関連して、地図帳の好きなBさんは、地図帳p.75で、韓国への日本人観光客が年間239万人で、アメリカの次に多いことを見つけた。



『楽しく学ぶ小学生の地図帳』 p.74~75

調べ活動の後、「韓国の小学生に手紙を書くとしたら」という設定で、日韓のつながりについて考えさせた。次のような文が見られた。「韓国がこんなに近いと知ってフェリーで行きたくなりました。日本にとって韓国はお隣の幼なじみだと思います。だから渡来人に教わったり、朝鮮通信使と交流したり、戦争でいやな思いをさせてしまったこともあったと思います。これからは仲よくして、もっと韓国のことを知りたいです。」

5 おわりに

過去から現在に至る日韓のつながりを見つめ、未来に生かすには、文化、歴史、経済、そしてベースとなる地理的な結びつきを実感的にとらえる必要がある。今回は、その窓口として、日韓の航路を地図帳でたどることで、地理的なつながりと歴史的なつながりについて考えていくことができた。

今後も地図帳を調べる道具としてだけでなく、考える道具として活用していきたい。